

モロッコに抗議する 7000 基のテント

本紙はエル=アイウン近郊で続くサハラウィ住民抗議の真っ只中に到着。
ここでは三週間前から 2 万人が人並みの生活を要求している。



イグナシオ・セムブレロ 2010 年 11 月 1 日アグダйм・イジク・キャンプ村

「これはサハラウィ警察だよ」と車の運転手がいかにも誇らしげな声で言った。到着したところは 7000 基のテントが集まる場所の、入り口検問ポスト。旧スペイン植民地の首都エル=アイウンからさほど遠くないところに、三週間前からサハラウィ住民が立てていったテント群だ。ここでは男性 8 人と女性 1 人からなる委員会がキャンプ村の運営に携わっている。

反射チョッキを着た数人の若者たちが、懐中電灯でざっと車の外部を検査すると、車はテント村アグダйм・イジクの入り口を通過した。ここには 2 万人の人々が集結しており、その周りをモロッコ軍が数日間を設置した 1 メートル半ほどの低い壁が囲んでいる。後部には数百あるいは数千人の治安部隊や軍隊が控えているのが、一目で見取れる。

エル=アイウンの東 15km にあるこのキャンプ村に到着するのは、サハラウィでない人間にとって並大抵ではない。おまけに外国人ジャーナリストとなればなおさらだ。街道に三ヶ所ある検問の最初のポストでは、モロッコ警察は通信省発行の許可書を求めてくる。入手など、とうていできない書類だ。

ほんの一握りの特派員たちが、ドラアやメルファ（それぞれサハラウィ男性、女性の民族衣装）に身を包んで、サンクリームと灰を混ぜたものを皮膚に塗って浅黒くするか、あるいは単に大型四輪駆動の中で太った女性の優しさに包み隠されるかして何とかもぐり込むことに成功した。ここは 1975 年にスペインが立ち去って以来、参加者の数からしても継続日数からしても最大級の抗議行動が脈打っている場所だ。

日暮れになると、アグダйм・イジク村はまずなにより秩序と組織化のために動き出す。安全を護るため、パトロールの若者達がそれぞれの担当区を歩き回る。一台の四輪駆動車が埃っぽい四つ辻に

置かれたゴミ袋を収集し、1人の看護婦が仮設診療所前で列を作る患者を診る。そして人々はタンクローリーが運んできた水を容器に入れるため列を作って順番を待つ。

「水不足ですよ。長い列を作らなければならないのは不便だけど、でも僕達はここで満足していますから。」と、まだ子供っぽい若者のムスタファは微笑みながらこう語りVサインを出した。この勝利のサインは、キャンプ村住民の多くが外来者とすれ違う時にする仕草だ。ジャーナリストのほかにも、少人数だが外国の支援活動家たちがアグタイム・イジク村を訪問しており、海外にここの映像を発信している。中でもメキシコのミュージシャン、アントニオ・ベラスケスなどは、今では外国の報道陣向けスポークスマンになってしまった人物だ。

昨日（10月31日）カナリア諸島の団体「サハラウィ人民支援プラットフォーム」の8名がここを訪れようと試みたが、不首尾に終わった。というのもエル=アイウン港で彼らの到着を待ち伏せていた200人ほどのモロッコ人たちが棒切れを投げ続け、やむ終えず下船は思い止まった。この後十数名の警官が船に乗り込み、8名の身分証明書を検査した末下船を禁止している。このエピソードは、去る8月末に11名のカナリア人に起きたことを思い出させる。この日彼らは西サハラの独立支援のため示威行動に出ようとしたところ、私服警官たちに袋叩きにされてしまった。

しかし海原のように続くテントは仮の住まいだ。公衆衛生設備が欠乏するアグタイム・イジク村は、70年代末ポリサリオ戦線がアルジェリアの南西にあるチンドゥフに建てた最初の難民キャンプを彷彿とさせる。しかし「向こうは亡命先、こっちは僕達自身の領土内で起こった大移動ですからね。」とある学生は強調した。

週末になるとキャンプ村は大勢の人でひしめきあう。モロッコの役所で公務員として働くサハラウィたちが、ここにテントを張った家族に合流するためだ。エル=アイウンを出てスマラへ向かう街道には、車もなく貧素な身なりのサハラウィたちが小脇にパンや水筒を抱えて、ここまで運んでくれる車を待ちながらヒッチハイクをしている。

アグタイム・イジク村は9人編成の調整委員会により運営されており、メンバーはみな40歳以下、ほとんどが失業中だ。現在までのところ社会的「差別」に対して政治的活動をした経歴はなく、彼らは独立を支持しているわけでもないとする。

こうして経験もほとんど持たない者たちが、一体どのようにして、即興で生まれたこの小さな町を急遽運営していくことなどできるのだろうか？さらにモロッコ内相を相手に要求を掲げ交渉することなどできるのだろうか？本紙は週末滞在中、委員会の三人のメンバーを相手にインタビューを行ったが、その1人ファデル・クマシュは「ここにいるのはサハラウィたちだけです。外にはない自由の空気が吸えるんですよ。」と言い、「それが僕らに力を与えてくれるんです。」と付け加えた。

クマシュおよびその他のメンバーは、18ヶ月前からこの遊牧民型抗議行動を内密で準備していたという。成功の規模は彼らの思惑をはるかに上回ってしまったという人もいる。ブハドールやスマラ

の町で同様の行動が芽生えなかった点について、別のメンバー、オマルは「警察がそれを封じ込めてしまったからです。でもここでは他所からの支援も得ましたから。」と気晴らすように言った。

というのもアグダйм・イジクに向けて、スペインを始めヨーロッパ諸国に居住する多くのサハラウィたちが移ってきたからだ。委員会の通訳をしているアミンもその1人で、「労働許可書を持ってカナリア諸島南部にあるレストランの厨房で働いていたのですが、この抗議行動を見過ごすことはできなくて仕事を止めて来ました。」と語った。

日ごとに新しい参加者が入ってくる。リン鉱石会社フォス・ブクラアの労働者たちも、この水曜日に合流した。そしてテント住民たちとのミーティングで「サハラの資源はサハラウィのもの」とリン鉱石開発や漁業をほのめかすシュプレヒコールを上げた。翌日木曜日には、モロッコ南部のシディ・イフニからの代表団が飛び入りで到着。住民たちが両脇に並んで作った通路を、代表団は行進し「サハラウィ、サハラウィ、自由へ向かって我々と手をつなごう」と叫んだ。しかし、そこまでだ。誰も民族自決権や独立を公然と要求はしない。

「囲まれたままでは、交渉は行えない」

タイエブ・シェルカウイ内相はモロッコでも名高い有力者で、ヨーロッパの大臣とは比べものにならない影響力を持っている。同氏との会談を断る者など決していないが、アグダйм・イジク村の委員会は例外だ。

シェルカウイ内相はこの木曜にエル=アイウンに到着。まずサハラウィ名士たちと会談し、キャンプ村の調整委員会との会合を土曜日に決定した。

「我々をさいなむ軍・警察の挑発が止み、囲いが解かれない限り招きには応じられない」と委員会の代表オマル・ズリビアルは語る。「それをやらないと、交渉はできない」、「囲まれたままでは、交渉は行えない」と繰り返した。

彼によると最近では、兵士たちは野外で用を足すサハラウィ女性たちを写真に収める「挑発」にまで及んだそうだ。この「囲み」によってモロッコ当局は「締め付けを厳しくする」ことができ、食糧や水の運び込みを監視でき、さらに海外のジャーナリストのアクセスを阻止できる。

委員会は今週政府が派遣した内務省高官たちと何度か話し合いを持ったが「彼らの目的は交渉ではなく、我々を捜査することだった」と委員会代表は不満を述べた。「我々にテントをたたみ自宅に戻るよう頼み、その後で要求を呑むと言うのです。」アグダйм・イジクの2万人の住人たちは仕事や住居、そしてモロッコ政府が行っている西サハラ天然資源の「略奪」の停止を要求している。

「我々の最大の望みは、我々の尊厳が尊重されることです。」と代表者の周りのサハラウィたちは口々に強調した。「私達を抑えつけるつらい治安規則、もうこれには我慢ができません。」と言う。確かにこの点では、モロッコのどの地域とも比較にならないほどだ。